

藤原宮大極殿院の調査

—第200次

1 はじめに

大極殿院は藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約165mの空間である。その中央には即位や元日朝賀等の儀式の際に天皇が出御する大極殿がある。

大極殿院は戦前に日本古文化研究所（以下、古文化研）が大極殿、大極殿院南門、回廊の部分的な調査をおこない、復元図を作成している¹⁾。以後、奈文研は古文化研の復元案を検証するとともに、大極殿院の詳細な様相の解明を目的として、調査を実施してきた。とくに近年は、回廊ならびに内庭の継続的な調査によって、回廊および各門の規模と構造、内庭東北部の様相や整備状況等をあきらかにしてきた。いっぽう、大極殿北方は、藤原宮第20次調査以降、宮造営の資材を搬入する運河SD1901Aが宮中心部を南北に貫流する状況を確認し、大極殿院南部では、大極殿院南門の建設開始により、運河SD1901Aから派生して東へ迂回して北へと延びる南北溝SD10801Bを検出してきた。この南北溝SD10801Bは北上することが確認されているが（第153次・第160次・第179次・第182次・第186次）、大極殿院東北隅を調査した第195次調査では検出されなかったことから、大極殿より北の経路や運河SD1901Aとの関係の解明が課題となってきた。また、第20次調査では大極殿背後に設けられた柱列を検出しており、その性格や大極殿との関係についても解明すべき課題であった。

以上のような検討課題のもと、今回は、大極殿院東北部にあたる第117次調査北区と第195次調査区の間に調査区を設定した。東面北回廊は、第195次調査で北面回廊への取付状況が判明したことから、東門から北面回廊取付部までの規模と構造の解明、および大極殿院内庭の様相の解明を主な目的とした。

調査は2019年4月23日から10月23日にかけて実施し、調査面積は1,179m²である。なお、調査区西部は第20次調査区、東南部は第117次調査北区と一部重複し、新規発掘面積は728m²である。
(松永悦枝)

2 古文化研の調査区

第200次調査区は、古文化研が1935年度におこなった高殿における発掘調査のうち、第四区の位置と重なる。古文化研は1934年度の調査で「第二区殿堂址」（後の大極殿院東門）を先行して検出している。翌年に、その北方で第四区の調査をおこない、東西に並んだ根石を合計14ヵ所確認し、東面回廊の発見に至っている。回廊の柱間は桁行12尺5・6寸（現尺、約3.8m）、梁行9尺8寸（約3m）と報告されている。ただし、当時の調査では東面北回廊と東門の接続部にあたる位置で根石が確認できておらず、接続関係は不明としている。

今回はまず、床土上面で古文化研の調査区の検出をおこなった。その上で、埋戻土を取り除き、当時の遺構検出状況を確認した（図85）。

古文化研は、東面北回廊東側柱筋に近い位置で東西幅約3mの南北に長い布掘りトレンチを掘って根石の位置を確認した上で、個々に壺掘り調査をして根石を検出していくという手順を踏んだと考えられる。さらに、南北トレンチの西側約3mの地点で壺掘り調査をおこない、対応する根石を検出していったとみられる。また、東面北回廊西側柱筋に近い位置では、深さ約1.5mまで掘り下げていることを確認した。報告書では単廊として報告されているが、複廊あるいは梁行2間以上の建物である可能性を追求していたとみられる。1999年度に実施した第117次調査北区においても、同様の南北トレンチおよび壺掘り痕跡を確認している。

このほか、今回の調査区西南隅でも、古文化研の調査区と思われる痕跡を確認した。先述の古文化研の調査のうち、第三区（大宮土壇および周辺の調査）のトレンチの一部に相当するとみられる。
(道上祥武)

3 検出遺構

基本層序　調査地は、旧鴨公村役場、鴨公小学校敷地内（1974年度転出）にあり、転出後は特別史跡として仮整備され、現在に至る。調査区西部では、鴨公小学校建設にともなうとみられる攪乱を多く確認した。

基本層序は、上から、史跡整備にともなう盛土（50～70cm）、役場・小学校の建設・移転にともなう攪乱土（15～50cm）、旧耕作土・床土（20～40cm）、藤原宮廃絶後の包

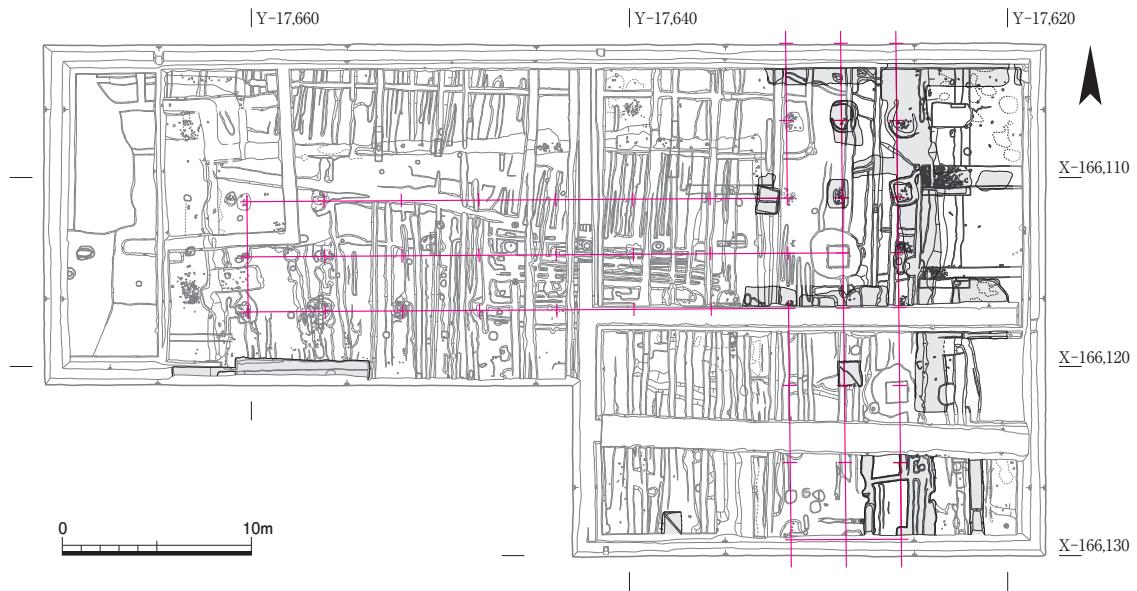


図85 日本古文化研究所による調査区の検出状況 1:400

含層（5～15cm）と続き、その下層が藤原宮期の遺構面となる。宮造営にともなう整地土は、大きく分けて、基壇造成に先行する整地土①と、基壇造成後に施される整地土②・③の3層を確認した。整地土①は暗褐色砂質土で、最下部に木屑や砂が堆積する。層厚は20～25cm前後であり、後述する大極殿後方東回廊²⁾西端を中心に調査区西部で確認した。内庭の本格的な整備にともなう整地土で、宮中枢部の調査で第二次整地土と呼んできたものと同一と考えられる。後述するように、礫敷をはさみa・bに細分される。整地土②は黄褐色砂質土である。金雲母を多量に含む粒子の細かな砂質土で、厚いところで約20cmで、北へいくにつれて厚さを減じ、5cm程度となる。調査区南半がもっとも厚く、今回の調査区では、東面北回廊と大極殿後方東回廊との取付部を東限とし、大極殿後方東回廊棟通り筋より南の範囲で確認した。第198次調査の整地土B1に対応する。なお、これまでの調査で、大極殿院内庭は整地土②の上面に、礫を敷いて整備されたことがあきらかとなっているが、今回の調査区では礫の分布が明確でなく、その大部分はすでに失われたと考えられる。整地土③は基壇造成後、内庭や各回廊の整備にともなって施される整地土である。暗灰色や黄褐・褐灰色砂質土からなり、宮造営時の南北溝や東西溝を覆う。大極殿後方東回廊北部の内庭部分を中心に、調査区東半で部分的に確認した。

藤原宮期の遺構検出は、東面北回廊の基壇土、および宮造営にともなう整地土上面でおこなったが、調査区西北部は後世に広範囲にわたり削平されており、藤原宮造営以前の整地・堆積土（黒褐色砂質土）上を遺構検出面と

した。黒褐色砂質土の下層には、地山の黒褐色シルトや灰色粘質土が堆積する。

藤原宮期の遺構

東門SB9500 調査区の南辺に位置し、第117次調査で検出した桁行7間、梁行2間の礎石建ち、瓦葺きの門。北妻柱列の礎石据付痕跡2基を再検出した。礎石据付痕跡や基壇土の遺存状況はよくないが（図89）、後述する瓦溜の状況から、門部分の基壇は回廊より東西に幾分広く造成されていた可能性が考えられる。

東面北回廊SC9490 調査区東部で検出した礎石建ち、瓦葺きの複廊。今回の調査区では、桁行3間分、礎石据付痕跡9基をあらたに検出し、全体で桁行6間、梁行2間分を確認した。いずれも礎石は抜き取られており、礎石据付穴（以下、据付穴）を確認した。据付穴は、遺存状況のよいもので一辺約1.1m、深さ約0.2mの大きさを有し、下部に根石として直径10cmの大礫を詰める。柱間寸法は、桁行約4.1m（14尺³⁾）、梁行約2.9m（10尺）であるが、南から4間目と5間目は桁行約2.9m（10尺）とする。この地点は後述する大極殿後方東回廊SC11540との取付部分であることから、柱間寸法をSC11540の梁行に合わせたと考えられる。

基壇は、状態が良好な部分で、約0.5mの高さで遺存する。黄褐色粘質土と暗灰黄色砂質土を互層に積み上げて造成する。1層の厚みは約10cmで、ところによっては5cm以下の薄い層を交える。基壇東辺は東側柱筋から東へ約1.6mと考えられ、この地点には、後述する宮廐絶後の瓦溜SX11551が厚く堆積していた（図96）。

基壇外装の据付溝や抜取溝等は検出されず、基壇全体

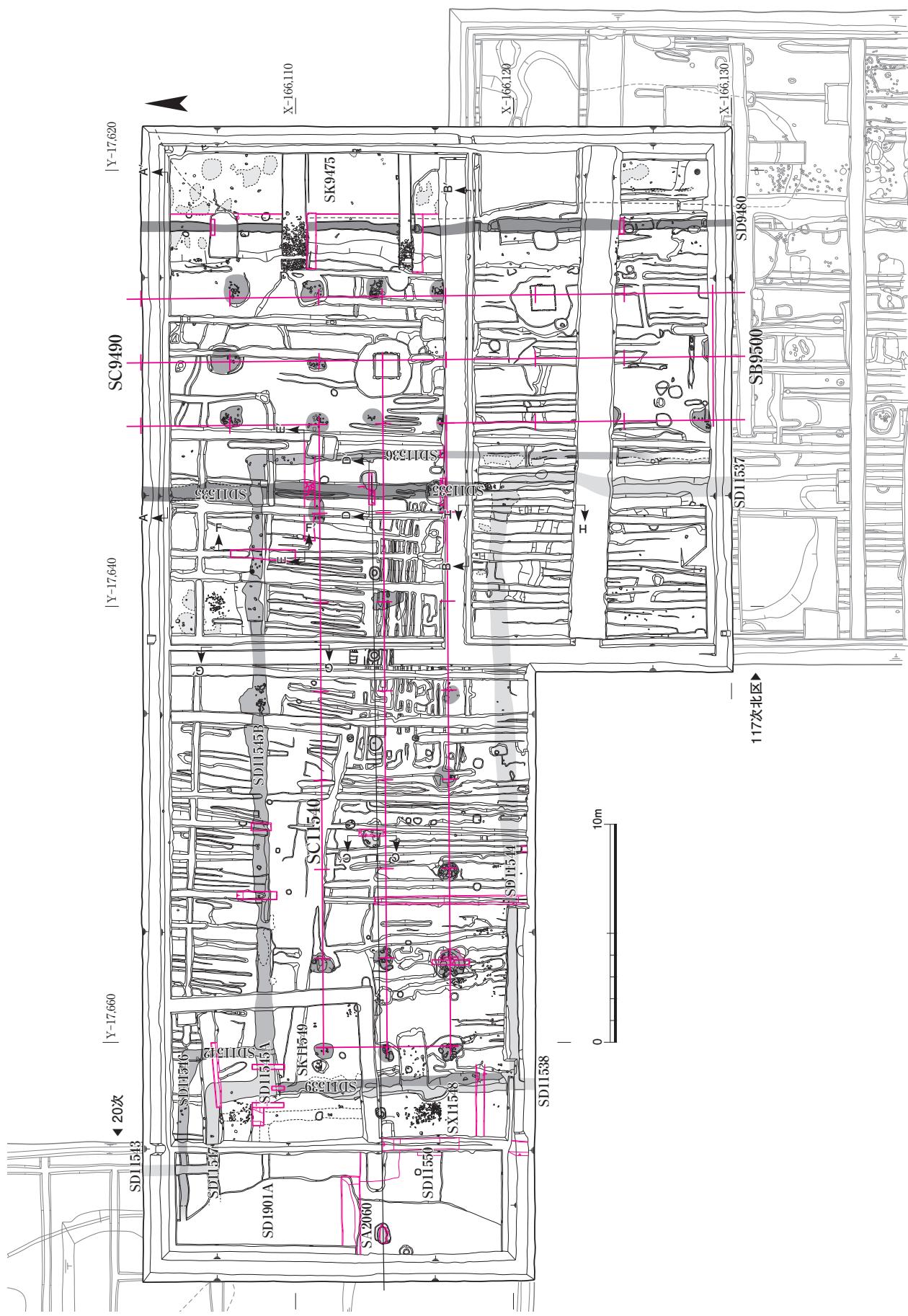


図86 第200次調査区遺構図 1:250



図87 SC9490とSC11540の取付部（東から）

が一定の削平を受けているとみられる。ただし、基壇土法面に、宮廃絶後の瓦溜SX11551が厚く堆積していることから、基壇は当初の形状をある程度とどめているとみられる。

大極殿後方東回廊SC11540 調査区中央部で検出した東西方向の礎石建ち、瓦葺きの複廊。棟通りは大極殿の推定北側柱から約21m、推定棟通りから約34m北方に位置する。東端で東面北回廊SC9490に取り付く。桁行7間、梁行2間で、礎石据付痕跡11基を検出した。北側柱筋の中央部分を中心に削平を受けている。SC9490同様、据付穴と根石を確認した（図88）。据付穴は、遺存状況のよいもので一辺1.3m、深さ約0.2mの大きさを有し、下部に根石として直径10cm大の礫を詰めるものが多いが、西端から3・4基目の据付穴では、内部に根石はみられず、礎石の残欠とみられる風化した石英閃緑岩が据付穴底面に張りついており、礎石が直に据え置かれていたとみられる。柱間寸法は、桁行約4.1m（14尺）等間、梁行約2.9m（10尺）等間である。

基壇の残存高は約25cmで、その基底部を残すのみである。基壇土はにぶい黄褐色砂質土を積み上げているが、互層状の版築層は確認できなかった。後世の削平を受けて基壇外装の据付溝や抜取溝等は失われている。ただ、凝灰岩片が、今回廊北辺を画する東西溝SD11545Bの埋



図88 SC11540の礎石据付痕跡（西から）



図89 SC9490とSB9500の基壇の高まり（北から）

土や、基壇縁とみられる範囲に沿って分布する状況から、基壇外装は凝灰岩を用いていたとみられる。また、礎石据付痕跡周囲からは、直径約0.4mの小穴を複数確認している。足場穴の可能性があるが、配置に規則性は認められず、確定には至らない。

掘立柱塀SA2060 調査区西部・中央部で検出した柱列。第20次調査で検出した柱列の東延長部分にあたる。大極殿の推定棟通りから約34m北方に位置する。第20次調査において運河SD1901A上で確認した1基を再検出するとともに、あらたに7基の柱穴を検出した。東面北回廊SC9490の西側柱筋から約2.6m西方の地点まで延びる。

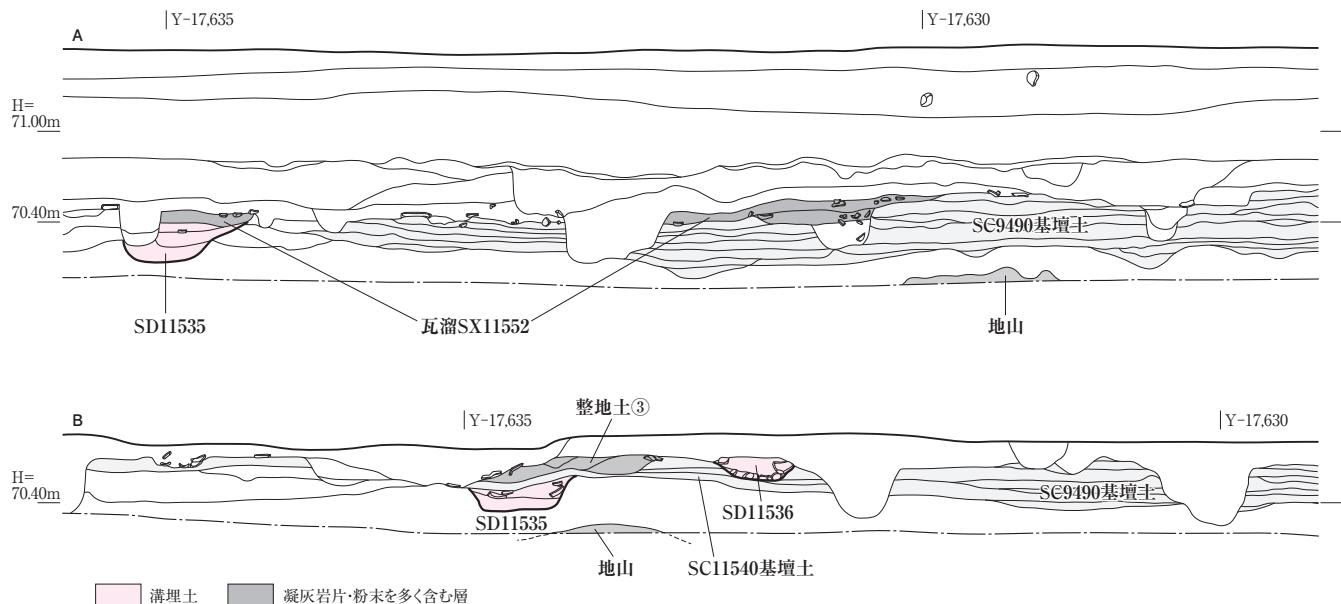


図90 第200次調査区土層図 1:50 (上: 調査区北壁、下: 第117次調査区北壁)

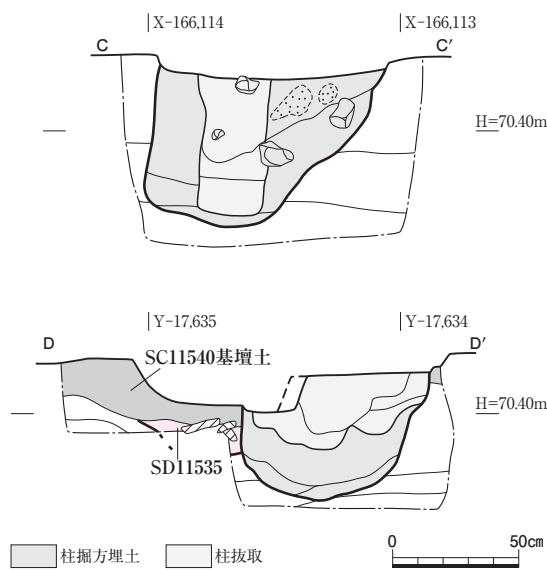


図91 SA2060断面図 1:30

柱穴は、0.6~0.8m前後の隅丸方形や楕円形を呈し、深さは約0.5mである。造営方位は東へ向かうにつれて北へわずかに振れる。大部分の柱掘方埋土には、約10cm大の礫が入る。

藤原宮造営期の遺構

南北溝SD9480 東面北回廊東側柱筋の東方約3mに位置する、幅約0.4m、深さ約0.2mの素掘溝(図90)。第117次調査で検出した南北溝SD9480の北延長部分にあたり、あらたに約13m、計約24mにわたって検出した。本調査区からさらに北へ延び、第195次調査で検出した南北溝SD9480へつながると考えられる。

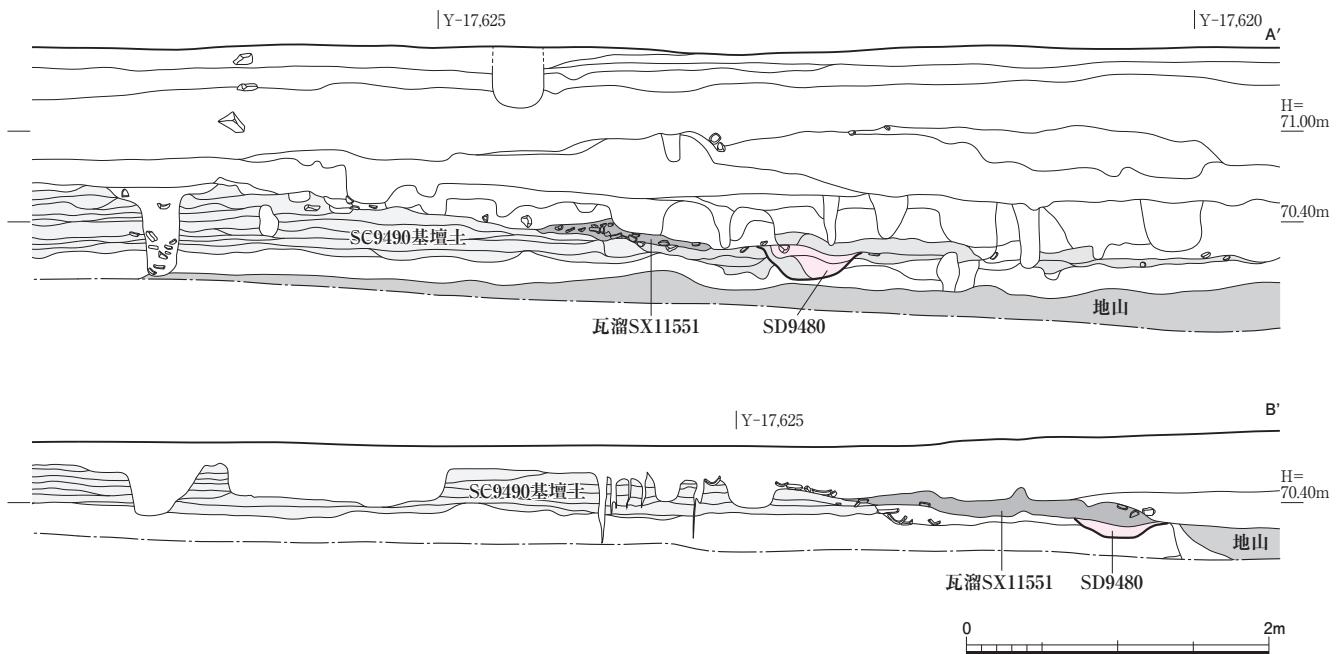
南北溝SD11535 東面北回廊西側柱筋の西方約3mに位置する、幅約0.9m、深さ約0.4mの素掘溝。南北約24mにわたり検出した。第195次調査で検出した南北溝SD9485へつながると考えられる。大極殿後方東回廊

SC11540を造営する際に、東面北回廊SC9490との取付部(図87)の範囲はSC11540の基壇土によって埋められる(図90・91D-D'・93E-E')。それより南は掘り直し(南北溝SD11537)、西に屈折させて東西溝SD11544へとつなげている。SC11540の基壇土によって埋められた部分の下部には瓦が大量に落とし込まれており、暗渠状を呈する。掘立柱塀SA2060と重複し、それより古い(図91D-D')。第190次調査区の南北溝SD9461、これを掘り直した雨落溝SD9460、そして第117次調査北区の南北溝SD9485の北延長部分である。

南北溝SD11537・東西溝SD11544 東面北回廊SC9490の西辺と大極殿後方東回廊SC11540の南辺を画する一連の素掘溝。SC9490の西側柱筋から南北溝SD11537の溝心まで、およびSC11540の南側柱筋から東西溝SD11544の溝心までの距離はそれぞれ約3mである。SC9490に沿って北へ延びる南北溝SD11537が、SC11540との取付部で西へ折れ、東西方向の東西溝SD11544となる。後者はSC11540の西南隅まで延び、南北溝SD11538に接続する。

南北溝SD11537は幅約0.6m、深さ約0.2mで、前述したように、SC11540基壇造成時、ほぼ同じ位置にあった南北溝SD11535を掘り直したものである。東西溝SD11544は幅0.6m、深さ0.4mで(図93H-H'・K-K')、約27mにわたって検出した。この一連の溝は、SC11540の基壇土とみられる黄褐色砂質土および整地土②によって埋め立てられている。

南北溝SD11538・東西溝SD11547 調査区西部で検出した、大極殿後方東回廊SC11540の西辺を画する一連の素掘溝。SC11540西端柱列から南北溝SD11538の溝心までの距離は、約1.4mである。南北溝SD11538は大極殿の推



定基壇東辺の北延長線上に位置し、SC11540の西北部付近で西へ折れ、東西方向の東西溝SD11547となる。上述のように、東西溝SD11544がSC11540の西南隅で「ト」字形に合流しているほか、西北隅では東から伸びてきた東西溝SD11545Aと接続する。これら一連の溝は、東西溝SD11545Aとの合流地点以南は整地土②によって、以北は東西溝SD11545AとSD11547とともに整地土③によって、南から順に埋め立てられている（図93 I-I'・J-J'）。幅0.5~0.6m、深さ0.4~0.5m。

南北溝SD11543 上述した東西溝SD11547から分岐した素掘溝で、調査区外の北へと延びる。第20次調査時に検出・掘削しており、調査区北端までの約2mを再検出した。調査区北端で東西溝SD11546と交差し、これより古い。第20次調査では古代の遺構としては認識していないかったが、溝の位置や埋土の状況等から藤原宮造営期の溝と判断でき、北へ延びて第198次調査の南北溝SD11516につながると考えられる。幅0.5m。

東西溝SD11545A 後述する東西溝SD11545Bと重複し、南北溝SD11542の西方で平面検出した素掘溝。東西溝SD11545Bよりも西へ延び、大極殿後方東回廊SC11540西北隅で南北溝SD11538に取り付く。南北溝SD11538、東西溝SD11547とともに整地土③によって埋め立てられる（図93F-F'）。幅0.8m、深さ0.2m。

南北溝SD11539 南北溝SD11538とほぼ同位置で検出した、幅0.4m、深さ0.2mの素掘溝。南北溝SD11538を埋め立てた整地土②の上面から掘り込まれる（図93 I-I'・J-J'）。埋土下部には砂が堆積しており、上部には瓦片が含まれる。削平により、残存する南北約10mのみを検出した。南はSC11540西南隅で溝心が東へ振れる



図92 SD11535と重複するSD11536・SD11545Bの検出状況（南から）

ことから、東へ折れてSC11540の南辺を画していたと考えられる。

南北溝SD11536・東西溝SD11545B・南北溝SD11542・東西溝SD11546 東面北回廊SC9490の西辺と大極殿後方東回廊SC11540の北辺とを画する一連の素掘溝。SC9490の基壇西辺を南北に通る南北溝SD11536がSC11540との取付部付近を横断して西へ折れ、東西溝SD11545Bと接続する。南北溝SD11536はSC11540の基壇土上面から掘り込まれており（図90B-B'・93E-E'）、南側は浅く、痕跡しかとどめていない。南北溝SD11536から西折する東西溝SD11545Bは（図93F-F'・G-G'）、SC11540の基壇土によって埋没した南北溝SD11535と重複し、これより新しい（図92）。

東西溝SD11545B西端では、SC11540西北隅付近で北に折れて南北溝SD11542と接続するが、すぐに西折し、さらに西へと続く（東西溝SD11546）。これらの埋土は、下部には砂の堆積、上部には瓦片を多く含む点で共通し

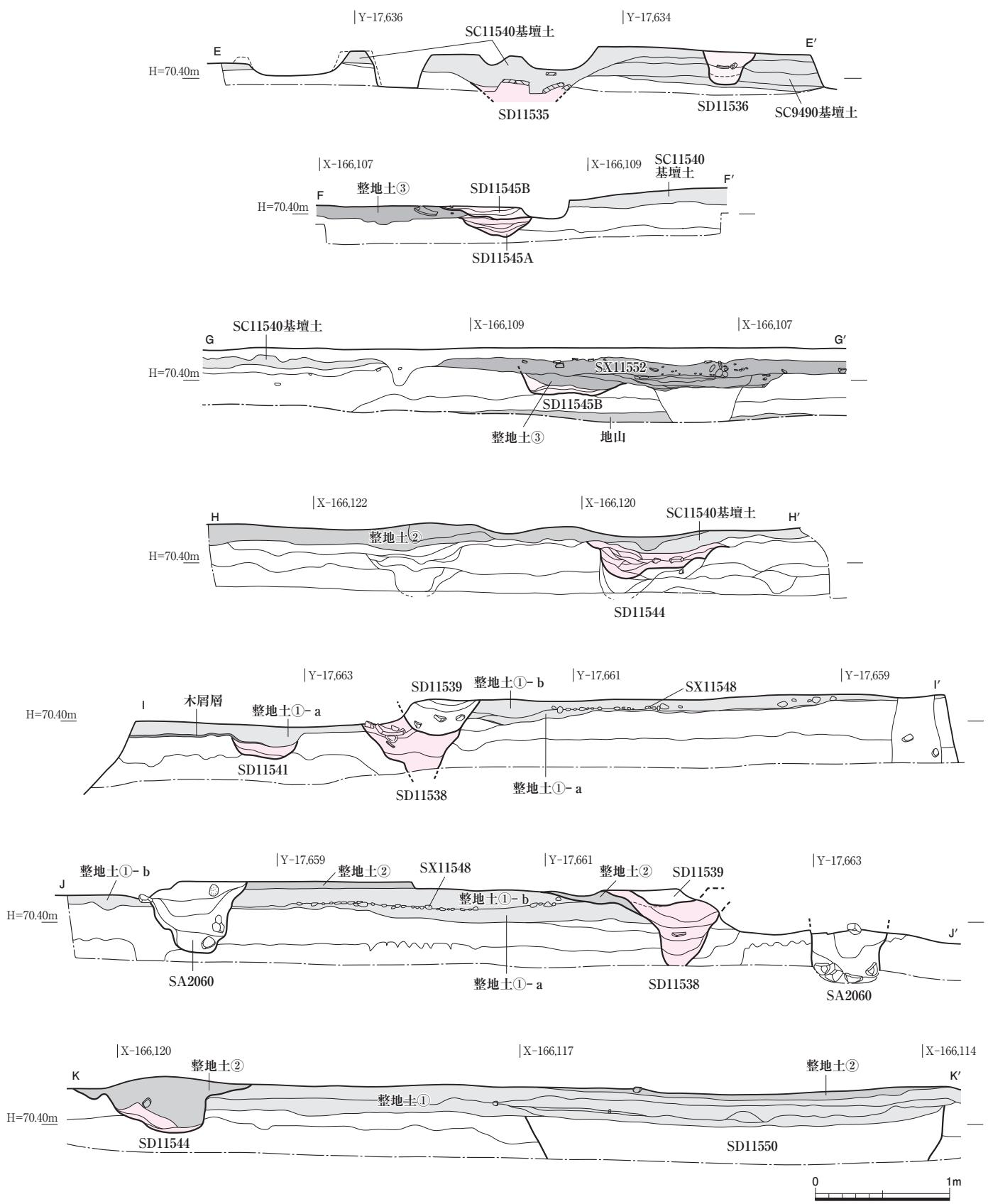


図93 第200次調査東西溝・南北溝断面図 1:40

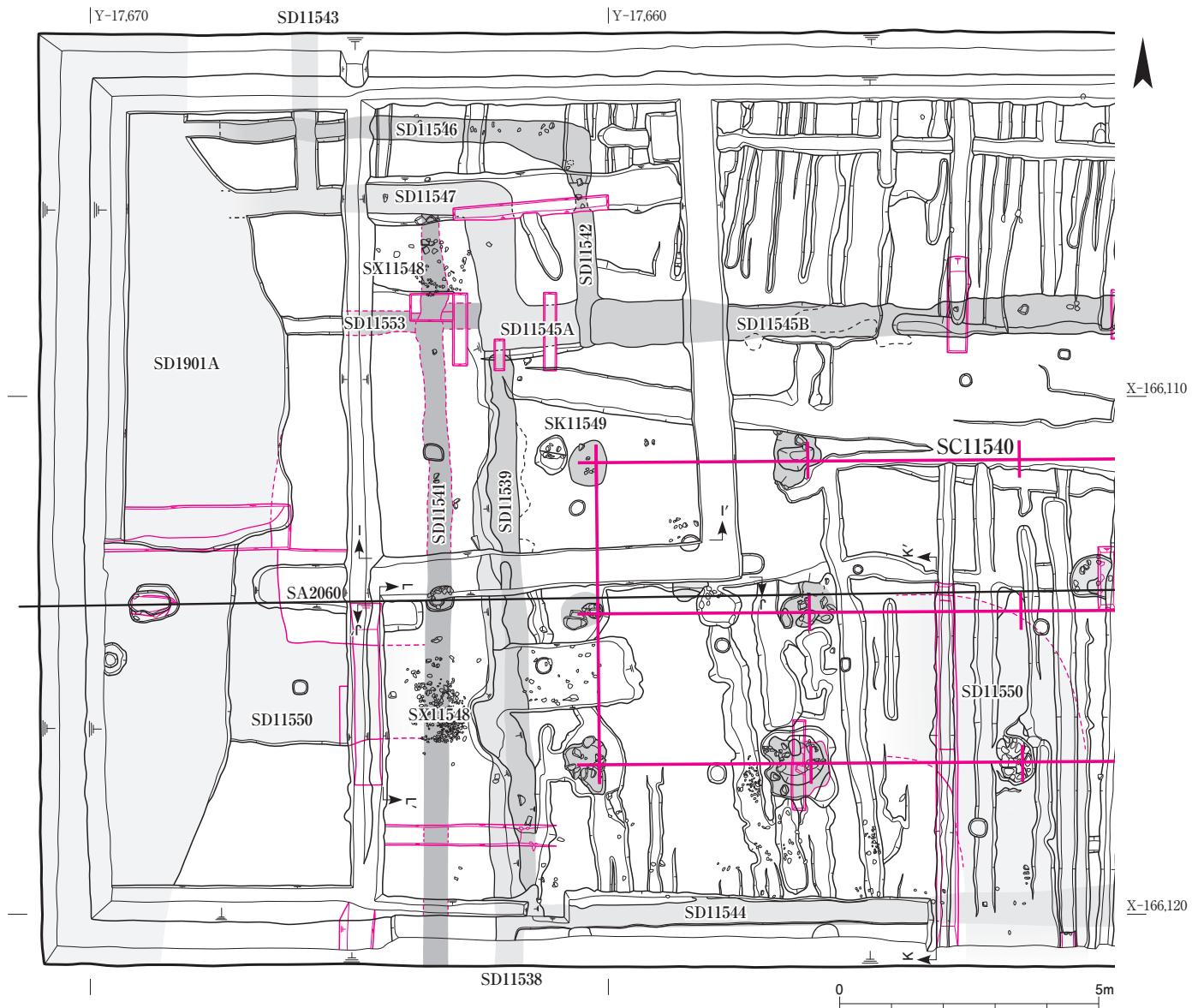


図94 大極殿後方東回廊SC11540西端付近遺構図 1:125

ている。つまり、この一連の溝は、SC11540の東北端と西北端付近で2度曲折し、西へと延びている。一連の溝の幅は0.4~0.8m、深さは0.2m前後。SC11540北側柱列から東西溝SD11545Bの溝心までの距離は、約3mである。SC11540北側柱筋の北を延びる東西溝SD11545B埋土上層には、基壇外装由来とみられる凝灰岩片が、5cm前後の厚さで堆積する箇所を確認している。

東西溝SD11553 東西溝SD11545Aの西方で検出した素掘溝（図94）。南北溝SD11541と交差し、さらに西へと続く。南北溝SD11541より古い。幅0.4m、深さ0.2m。整地土①-aに覆われており、断面調査において部分的に確認した。東西溝SD11545A・Bと筋を同じくすること

から、これらとともに、SC11540の北辺を画することで、SD11553→SD11545A→SD11545Bの順に、付け替えられたと考えられる。

南北溝SD11541 南北溝SD11538の西方約1.5mに位置する素掘溝（図94）。幅0.3~0.5m、深さ約0.1mで、約14mにわたり検出した。北端で交差する東西溝SD11547より古く、これより北には延びない。

東西溝SD11553と南北溝SD11541は、運河SD1901Aと東西溝SD11550がある程度埋め立てられた後に掘削され、その後整地土①-aによって覆われる（図93 I-I'）。
運河SD1901A 調査区西辺部で検出した南北溝。第20次調査区との重複部で、南北約15m、東西約3mを再検

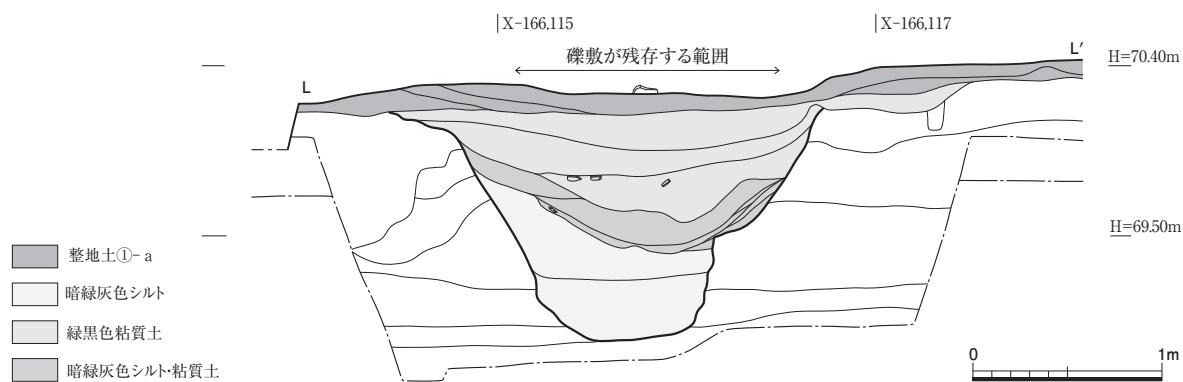


図95 東西溝SD11550東壁断面図 1:40

出した。調査区南辺から約4m北方の地点で、東西溝SD11550が取り付く。SD11550との取付部を中心に、とくにその北側は運河の東肩が東側へ緩やかに膨らむ。後述するSD11550と一緒に作業により埋め立てられる。

東西溝SD11550 運河に取り付く素掘溝で約3m分を平面検出した。一部、第20次調査時の排水溝を利用して掘り下げ、断面観察をおこなった。幅2.2m、深さ1.2m、底面の標高は69.0m。運河から東へ約15m、大極殿後方東回廊SC11540南側柱の西から3基目の据付穴付近を基点に、南へ大きく弧状に曲がる。大極殿院南門南で運河SD1901Aから派生し、大極殿東方を北へ流れる南北溝SD10801Bにつながると考えられる。埋土は、上から暗黒色粘質土、暗緑灰色シルト・粘質土、暗緑灰色シルトに大きく分けられる。暗黒色粘質土より下層の各堆積の境界には木屑や有機物を大量に含む層をはさむことから、ある期間開口していた際に有機物層が形成され、その後、粘質土やシルトで順次埋まり、最終的に運河とともに、整地土①-aで埋め立てている(図93K-K'・95)。

礫敷SX11548 東西溝SD11550や南北溝SD11541を覆う整地土①-a上面で検出した。東西溝SD11550と運河SD1901Aとの取付部近くの遺存状況は比較的良好で、少なくとも東へ約5mの範囲にわたる礫敷を確認した。礫は運河SD1901AとSD11550を広く埋め立てた後、その上面に敷き詰められ、その後、整地土①-bで埋められている(図93I-I'・J-J')。

第198次調査では、運河SD1901Aの埋立後の地盤沈下部分を中心に、礫敷を2層にわたって敷設する状況を確認している(『紀要2019』)。SX11548も、SD11550の埋土が下方に沈んだ部分を中心に礫を敷く点が類似する。

土坑SK9475 調査区東端で検出した土坑。第117次調査北区東北部で検出していた土坑で、その北延長部分にあたる。新規発掘調査区の東壁において北肩を確認しており、第117次調査北区と合わせた南北規模は約28m、

東西幅は約5~8m以上の不整形な橿円形を呈する。埋土には大型の瓦を多く含むほか、大きいもので1m前後の塊状の凝灰岩が堆積する。第117次調査では、多量の瓦片や土器、木屑、木製品、凝灰岩片や碎片が出土しており、造営時の廃材等を廃棄しつつ埋め立てたと考えている(『紀要2003』)。

藤原宮廃絶後の遺構

土坑SK11549 大極殿後方東回廊SC11540北側柱西端の据付穴西辺に接する位置で検出した土坑。南北0.8m、東西0.6mの橿円形を呈し、深さは約0.5m。SC11540基壇上面から掘り込まれており、埋土からは黒色土器や「て」字状口縁を有する土師器皿のほかに、藤原宮期の瓦が大量に出土した。

瓦溜SX11551・SX11552 調査区北辺部から東半にかけて、床土直下で検出した瓦溜。瓦溜SX11551は東面北回廊SC9490の棟通りより東半に、SX11552は大極殿後方東回廊SC11540北部において、回廊に沿って帯状に広がる(図90A-A'・93G-G')。とくに両回廊の取付部とSC9490東側柱筋に沿って厚く堆積する。瓦は藤原宮期のものであり、両回廊に瓦が葺かれていたことを示す。SX11551のなかでも、SC9490東側柱筋から東へ1.6m地点で瓦の堆積が密であり、瓦の破片も大型で遺存状況のよいものが目立つ。この地点はSC9490基壇の東端にあたり、宮廃絶後には窪地状になっていたことから、そこに瓦が厚く堆積したと考えられる。基壇縁に沿って瓦溜が厚く分布する状況は東門も同様であったとみられ、第117次調査では東門SB9500北妻の東側柱筋から基壇東裾に沿って、鉤手状に瓦が厚く堆積する状況を確認した。今回の調査区同様、この地点が基壇縁で、SB9500基壇は東面北回廊よりも東へ突出していた可能性が示唆される。

SX11551下部には、瓦とともに淡褐色を呈する粘質土が堆積する。基壇土に由来するものとみられ、回廊東辺に沿って分布する。



図96 瓦溜SX11551検出状況（北から）

このような瓦溜は第117次・第190次・第195次調査でも確認されており、東面回廊に共通する特徴といえる。
その他 調査区東部では、東面北回廊SC9490の基壇土を掘り込む木組の枠をもつ井戸を2基検出した。これらは近世以降のものとみられる。

（松永）

4 出土遺物

瓦磚類 第200次調査において出土した瓦磚類は表11のとおりである。軒瓦は瓦溜SX11551・11552から出土したもののが大半であり、その他の遺構から出土したものはごく少量である。軒瓦は型式不明のものを含め、247点が出土した。

遺存状態が良好なものを中心に図示した（図97）。

1は6273A、2・3は6273B、4は6273C、5は6275D、6は6281A、7・8は6281B、9は6641Aa、10・11は6641F、12・13・16は6641Ab、14は6641E、15は6641C。2は東西溝SD11545、10・11・12は土坑SK11549から、その他はすべて瓦溜SX11551・11552から出土した。

大極殿の所用軒瓦は6273B-6641Eの組合せが基本であり、大極殿回廊については、6273A・B-6641Eを基本として、多様な組合せが用いられ、なかでも、東面回廊では6281A-6641Fの出土が多いことが指摘されている⁴⁾。また、北面回廊SC11510では大極殿および大極殿院回廊の組合せを基本としつつ、推定大和盆地産（大

表11 第200次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6273	A	4	6641	Aa	3	ヘラ描き丸瓦	29
	B	25		Ab	7	ヘラ描き平瓦	11
	B?	1		C	15	面戸瓦	5
	C	16		C?	1	熨斗瓦	12
	C?	4		E	56	瓦製円盤	1
6275	D	2		E?	2		
6281	A	8		F	29		
	B	7		F?	2		
	B?	1	6643	A?	1		
6273		14		不明	26		
6273?		2					
不明		21					
計		105			142		
			丸瓦		平瓦	棟原石	
重量			877.5kg		2,736.1kg	0.6kg	
点数			14,020		44,330	2	

※丸平瓦は埋戻土出土分は含まず。

和郡山か）のJグループの瓦が比較的多く出土している（『紀要2019』）。

軒丸瓦は6273A・B、軒平瓦は6641Eの出土がもっとも多く、瓦溜SX11551・11552の両方で出土している。次に多いのが、Jグループの6273C、6641Aa・Ab、西田中・内山瓦窯産の6281B、6641F、安養寺瓦窯産の6281A、6275D、6641Cである。このうち、西田中・内山瓦窯、安養寺瓦窯産の軒瓦が瓦溜SX11551・11552の両方で出土しているのに対し、Jグループの軒瓦は、大極殿後方東回廊SC11540に沿う瓦溜SX11552でまとまって出土している。したがって、東面北回廊SC9490、大極殿後方東回廊SC11540ではこれまでの調査成果と同様、6273A・B-6641Eを基本としつつ、安養寺瓦窯および西田中・内山瓦窯産の瓦が使用されていたと考えられる。さらに、SC11540ではJグループの軒瓦を一定量用いていたと考えられ、北面回廊に近い様相といえる。

今回出土した6641Cの多くは脇区上半を削り落とす、藤原宮内で広く出土するものだが、脇区を残すものが少量含まれていた（15）。後者の藤原宮での出土は比較的小なく、平城宮で一定量が出土している。また、今回出土した6281Bのなかには瓦当側面に縦縄タタキを残すものが含まれていた（7・8）。6281Bの瓦当側面上半の縦縄タタキ調整は、範傷が進行した、西田中瓦窯の操業最終段階の比較的新しい製品に限られた特徴であるとの指摘がある。この特徴をもつ6281Bは消費地出土資料では平城宮・京で少量確認されているが、藤原宮で確認されたのは今回が初めてである⁵⁾。

ヘラ描き瓦は全容が不明なものが多いが、「十」「キ」

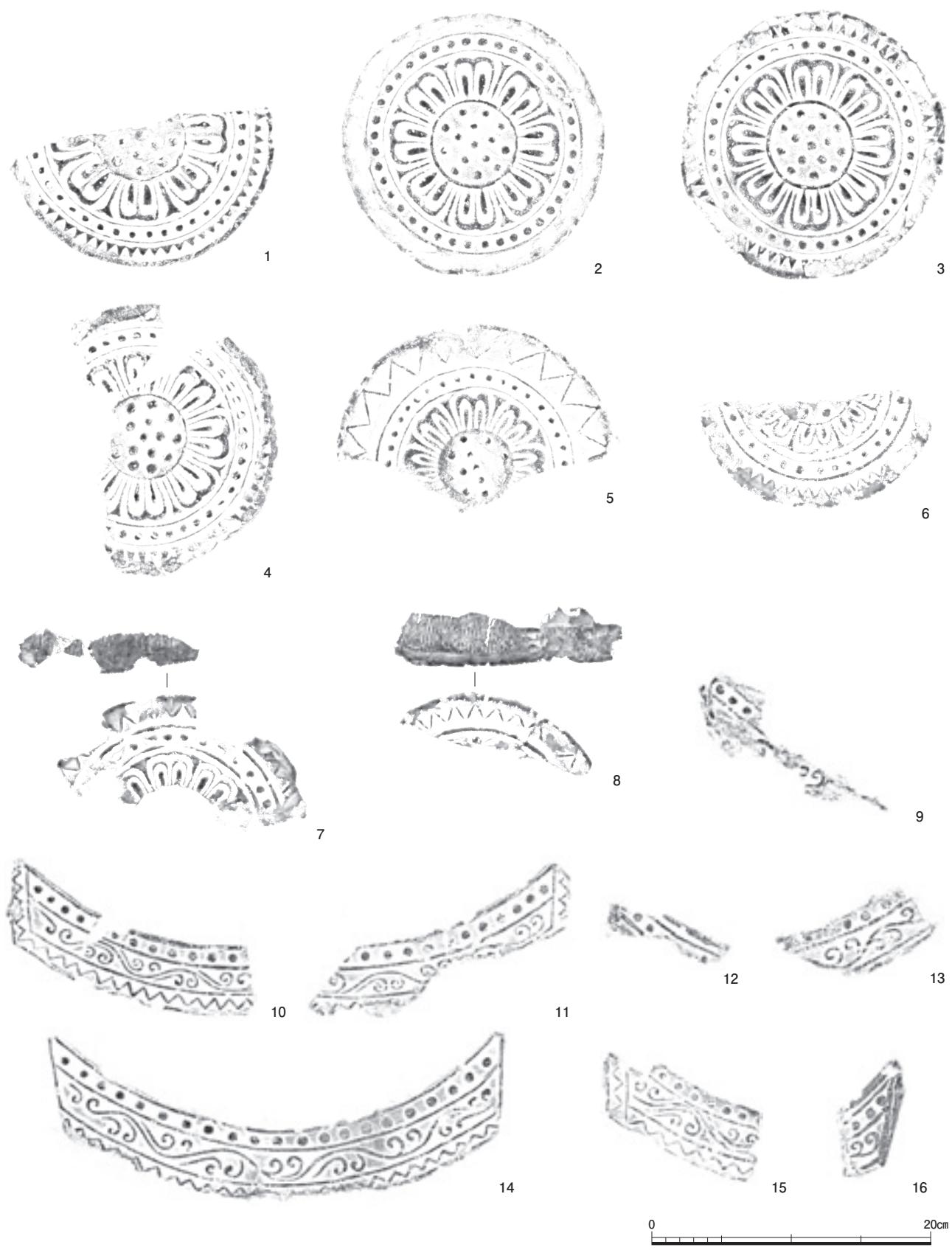


図97 第200次調査出土瓦 1:4

のヘラ描きをもつものを確認している。(道上・清野陽一)

土 器 整理用木箱17箱分の土器が出土した。出土土器は、弥生土器、土師器、須恵器、青磁、黒色土器、瓦器等がある。以下では、整地土(基壇土含む)および瓦溜SX11551・11552出土資料を中心に報告する(図98)。

1は土師器高杯C。脚部外面は垂直方向のヘラケズリあるいはヘラナデで調整し、内面には絞り痕や指頭痕を明瞭にとどめる。杯部内面には一段放射暗文がわずかにみられる。宮造営以前の整地土出土。2・3は土師器杯C。内面には一段放射暗文を施し、外面はb0手法。東面北回廊SC9490基壇土の断割調査において出土した。4は土師器杯C。内面に一段放射暗文がみられ、外面はb0手法。5は土師器鉢A。内面には一段放射暗文の上段に連弧暗文が施される。外面はb1手法か。内面に煤付着物あり。瓦溜SX11551下層出土。基壇土搔出しにもなうものとみられる。

これ以外に、瓦溜SX11552からは瓦器椀片が出土している。小片のため図化はできなかったが、内面および口縁部外面に水平ヘラミガキ、圈線以下の胴部外面は指押さえ後ヘラケズリによる調整を施すもので、川越俊一による第Ⅲ段階D型式⁶⁾の特徴をみせる。くわえて、平安時代の特徴を有する土馬が複数個体出土した。瓦器椀とともに瓦溜SX11551・11552の形成時期を示す資料といえる。これらのほか、宮造営以前の整地・堆積土からはTK10～TK43型式相当とみられる杯H、甌等の須恵器片が、同面で検出した小穴からは古墳時代後期の須恵器短頸壺が出土している。
(山藤正敏)

木製品 南北溝SD9480や東西溝SD11550等の溝、東面北回廊SC9490東端の瓦溜SX11551下層から出土しているが、大部分が表面に加工痕がある棒材や燃えさし、木端、雜木等である。木端のなかには、側縁にかけて鋭利な刃物で整形した断面隅丸方形を呈するものがある。木製柄の柄元部分と考えられるが、瓦溜SX11551上から掘り込まれた土坑状の窪みからの出土であり、宮廐絶後のものである。
(松永)

凝灰岩 東面北回廊SC9490東縁、大極殿後方東回廊SC11540南北外縁を中心に凝灰岩片が出土した。二上山産出の白色凝灰岩(流紋岩質凝灰角礫岩)と淡緑色の竜山石(流紋岩質凝灰岩・兵庫県加古川西岸産出)の2種からなり、総重量は前者が2,531g、後者が172gを測る。SC11540の

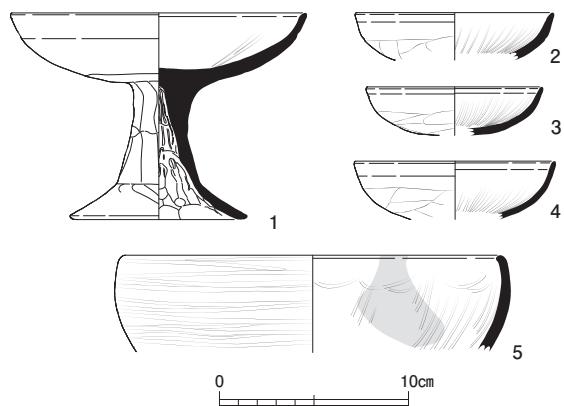


図98 第200次調査出土土器 1：4

周囲では、帯状に固着する二上山凝灰岩を各所で検出したことからも二上山凝灰岩が主体を占めていた点は疑いないが、少量ながら竜山石片も回廊各面から出土しており、SC9490・11540の基壇外装では両者を組み合わせて使用していたとみられる。従来、SC9490東側では花崗岩礫による基壇外装が想定されてきたが(『紀要2003』『同2017』)、今回、瓦溜SX11551下層で一定量の凝灰岩片の出土をみたことにより、SC9490の基壇外装は東・西面ともに凝灰岩製の切石積基壇として理解できるようになった。

調査区東端では、造営期のSK9475およびそれを覆う整地土内において大量の凝灰岩片・粉末が部分的には層をなして堆積する状況を確認しており、回廊基壇造営時に生じた廃材がまとめて投棄されたものと考えられる。

その他 断割や東西溝SD11550検出時に桃核、東西溝等からは骨や粉殻といった動・植物遺体が出土しているほか、耕作溝や床土からは、半錢、サヌカイト製の剥片、削器、石核、輔羽口とみられる土製品等が出土した。

(廣瀬 覚)

5 地質学的調査

東面北回廊SC9490西辺と大極殿後方東回廊SC11540北辺とを画する南北溝SD11536、東西溝SD11545A・B、運河SD1901Aに取り付く東西溝SD11550の4条の溝の堆積環境について検討をおこなった。さらに第20次調査区東壁において、藤原宮造営以前の整地・堆積土(暗褐色砂質土)や整地土①-a、遺構の機能時および埋積過程の堆積物を検討し、宮造営以前の堆積土から、宮造営期の遺構の機能や堆積環境の変遷をあきらかにするため、地

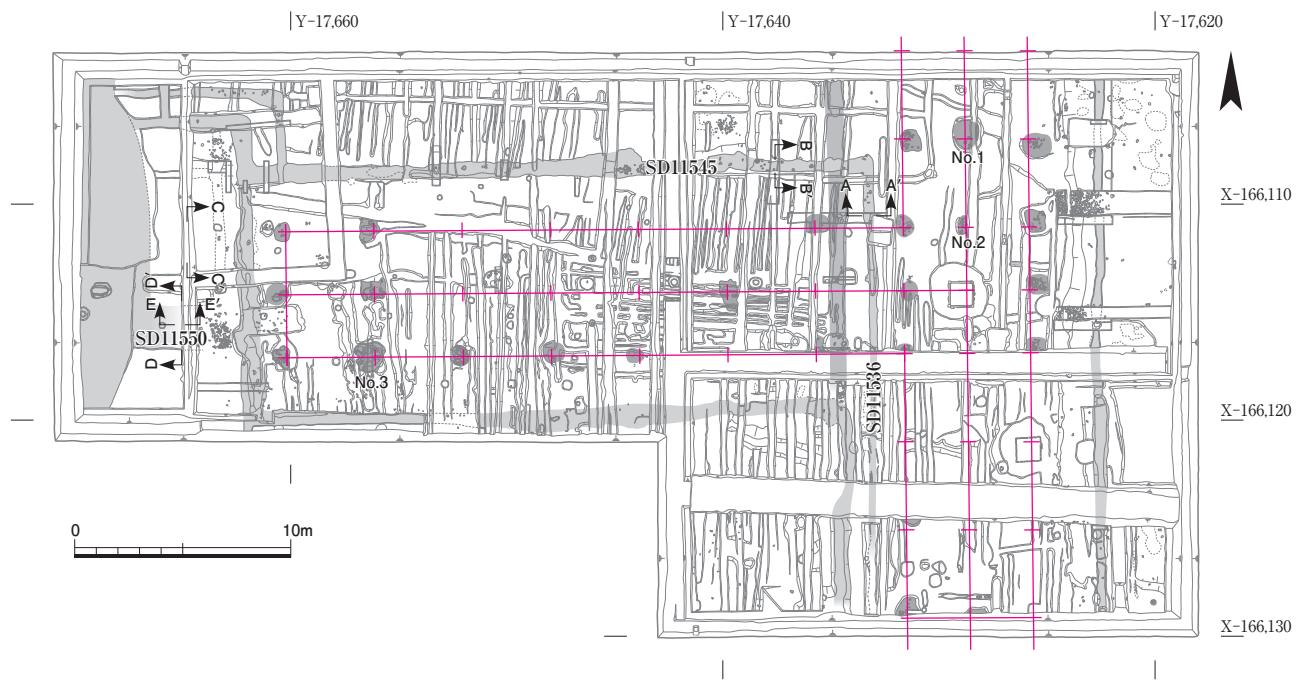


図99 第200次調査の地質学的検討実施位置 1:350

質切取試料を採取し、層相観察と軟X線撮像による堆積構造の観察をおこなった。堆積構造の詳細については、現在解析を進めているが、それぞれの溝の堆積物から、その機能時を示すと考えられる葉理(ラミナ)や漣痕(リップルマーク)をともなう流水堆積構造が認められた。これらの単層は一つの堆積システムを反映するため、季節性や遺構機能の変化等、遺構を取り巻く細かな環境の変遷を読み取る重要な手掛かりとなる可能性が高い。そこで、堆積構造の詳細を明確にした上で単層ごとに花粉分析を加えることで、環境の細かな変遷について検討をおこなうこととした。

また、東面北回廊SC9490と大極殿後方東回廊SC11540の礎石据付痕跡計3地点において、簡易的な土壤支持力強度の計測をおこなった。第198次調査では、北面回廊SC11510と北門SB11500で計測を実施し、礎石に積載された構造物の特性が土壤支持強度に反映されることがあきらかとなった(『紀要2019』)。各地点における計測値を蓄積していくことで、構造物復元の際の一要素となるよう、調査をおこなった。

今回実施した堆積構造の観察と土壤支持強度の計測位置は図99のとおりである。これらの成果については、次年度以降にまとめて報告することとする。(村田泰輔)

6 検出遺構の検討

大極殿後方東回廊の規模と構造

大極殿後方東回廊SC11540は礎石建ち、瓦葺きの複廊で、東面北回廊SC9490に取り付く。桁行7間、梁行2間で、東面北回廊取付部から西へ28.7m、7基目の礎石据付痕跡を西妻柱列と考える。調査区西部は鴨公小学校建設時の攪乱を受け、藤原宮造営期および宮期の遺構を検討する上で制約があるが、東から7基目の礎石据付痕跡の北西には、SC11540西半部の基壇裾を延びる東西溝SD11545や南北溝SD11538、SD11539が位置することから、ここが西妻柱列にあたるとみてよい。柱間寸法は桁行14尺等間、梁行10尺等間で、桁行総長28.7m、梁行総長5.8mの規模を有する。既往の調査で、SC9490は東門SB9500から桁行14尺等間、梁行10尺等間で北へ延びると推定されていたが、SC11540との取付部の桁行2間のみを、SC11540の梁行寸法に合わせて桁行10尺で柱間寸法を調整していたこともあきらかとなった。このことから、SC11540とSC9490は一連の計画のもとで柱位置を決定していることがわかる。

また、後述するように、かねてより共通性が指摘される前期難波宮内裏前殿区画では、SC11540と同様の位置に、桁行7間の東西棟建物SB2101が存在する点が相似

する。このことからも、SC11540は東面北回廊SC9490と西面北回廊をつなぐものではなく、東面北回廊から内庭部側へ逆「ト」字形に延びる回廊であった蓋然性が高い。

造営溝の変遷 今回の調査では、藤原宮造営期の運河や、各回廊の基壇裾に沿って掘られた、いわゆる造営溝が複雑に展開する状況を確認した。このような溝は、かねてよりその性格が議論されており、第195・198次調査では、回廊建設時における雨水排水の溝という性格を提示した（『紀要 2019』）。今回の調査においても、溝埋土には大量の砂や木屑の堆積がみられること、大部分の溝は内庭および回廊の整備で施される整地土②・③により、最終的に埋め立てられていることを確認しており、第195・198次調査の所見を追認する成果が得られた。

これらの溝の掘削と埋立の順序から、今回の調査区における遺構変遷を考えると（図100）、まず、大極殿北方における回廊造営前の整備段階として、藤原宮造営のための資材運搬等の目的で設けられた運河SD1901Aや、それに取り付く東西溝SD11550がその機能を終え、埋め立てられる（I期）。そして本格的な回廊造営にともない、東面北回廊SC9490および大極殿後方東回廊SC11540の造営溝（南北溝SD9480・11535、東西溝SD11553・南北溝SD11541）が掘削され、SC9490の基壇造営が始まる（II期古）。ただ、SC11540にともなう造営溝は、一旦埋められる（整地土①-a）。

その後、SC9490の造営が進むとともに、SC11540の基壇を造成し、再度、SC11540にともなう造営溝（東西溝SD11544-南北溝SD11538-東西溝SD11547-南北溝SD11543、東西溝SD11545A）が掘削される。この時、SC9490との取付部は基壇土によって覆われることから、取付部以南の造営溝の付替えがなされる（南北溝SD11535→南北溝SD11537）。大極殿側では内庭の整備にともなう整地土が敷設され、内庭の整備も進む。これにより、SC11540の南辺、西辺を画する造営溝（SD11537-SD11544、SD11538-SD11547）は整地土②によって埋められる（II期新）。

ところが、SC11540はここでもただちに建設されず、後述するように、掘立柱塀SA2060がSC11540の基壇を掘り込み、設置される。また、東面北回廊SC9490の完成により、SC11540基壇を掘り込む溝の掘削や溝の付替えがなされる（南北溝SD11536-東西溝SD11545B-南北溝SD11542-東西溝SD11546）。これら一連の溝は、埋土に大

量の砂と瓦を含むことから、SC9490の雨落溝を兼ねていたとみられる（III期）。

やがて、大極殿後方東回廊の造営が再開する。基壇上にあった掘立柱塀SA2060を撤去し、柱の設置や基壇外装等の整備が進められる。北面回廊側では内庭の整備が順次進み、これにともない、SC11540北辺を画する東西溝SD11545Bが整地土③で埋められる（IV期）。

そしてSC11540が完成し、ここようやく、東面北回廊SC9490に大極殿後方東回廊SC11540が接続する回廊が完成するに至る（V期）。

以上のように遺構の変遷を整理でき、基壇裾を巡る各造営溝は、各回廊の造営にともない、数回にわたり付け替えられ、掘り直されている状況を確認した。

掘立柱塀SA2060の規模と性格 今回の調査では、第20次調査で検出した掘立柱塀SA2060から東へつづく柱穴を7基確認した。これらは第20次調査で検出したSA2060柱列と造営方位をそろえるほか、柱穴の直径、掘方底面の標高も共通することから、一連の柱列とみられる（表12）。加えて今回の調査により、柱穴は大極殿後方東回廊SC11540基壇土から掘り込まれている点、また、東面北回廊SC9490の西を区画する南北溝SD11535の東肩を壊している点から、SC11540の基壇造成後に設けられた柱列であることがあきらかとなった。そして掘立柱塀と瓦葺磧石建物という構造的な差異から、SA2060はSC11540の基壇造成後、同回廊完成までの間に設けられたものであり、その建設再開にともない撤去されたと考えられる。つまり、前述の遺構変遷において、SC9490が完成し、そこにSC11540が取り付き、大極殿東北部の区画が完成する前のIII期に設けられたといえ、SA2060の設置はSC11540の造営が一旦中断したこと示している。

表12 掘立柱塀SA2060の比較

	第20次調査	第200次調査
造営方位	東西方向	東西方向
掘方直径	0.5~0.8m	0.6~0.8m
底面の標高	69.9~70.2m	69.5~70.2m
柱間寸法	4.4~4.7m 15~16尺	3.8~7.5m 13~26尺
掘込面	運河SD1901A 埋立土ヶ	大極殿後方東回廊基壇土
埋土	-	整地土②が混じる。 10cm前後の礫が入り込む。

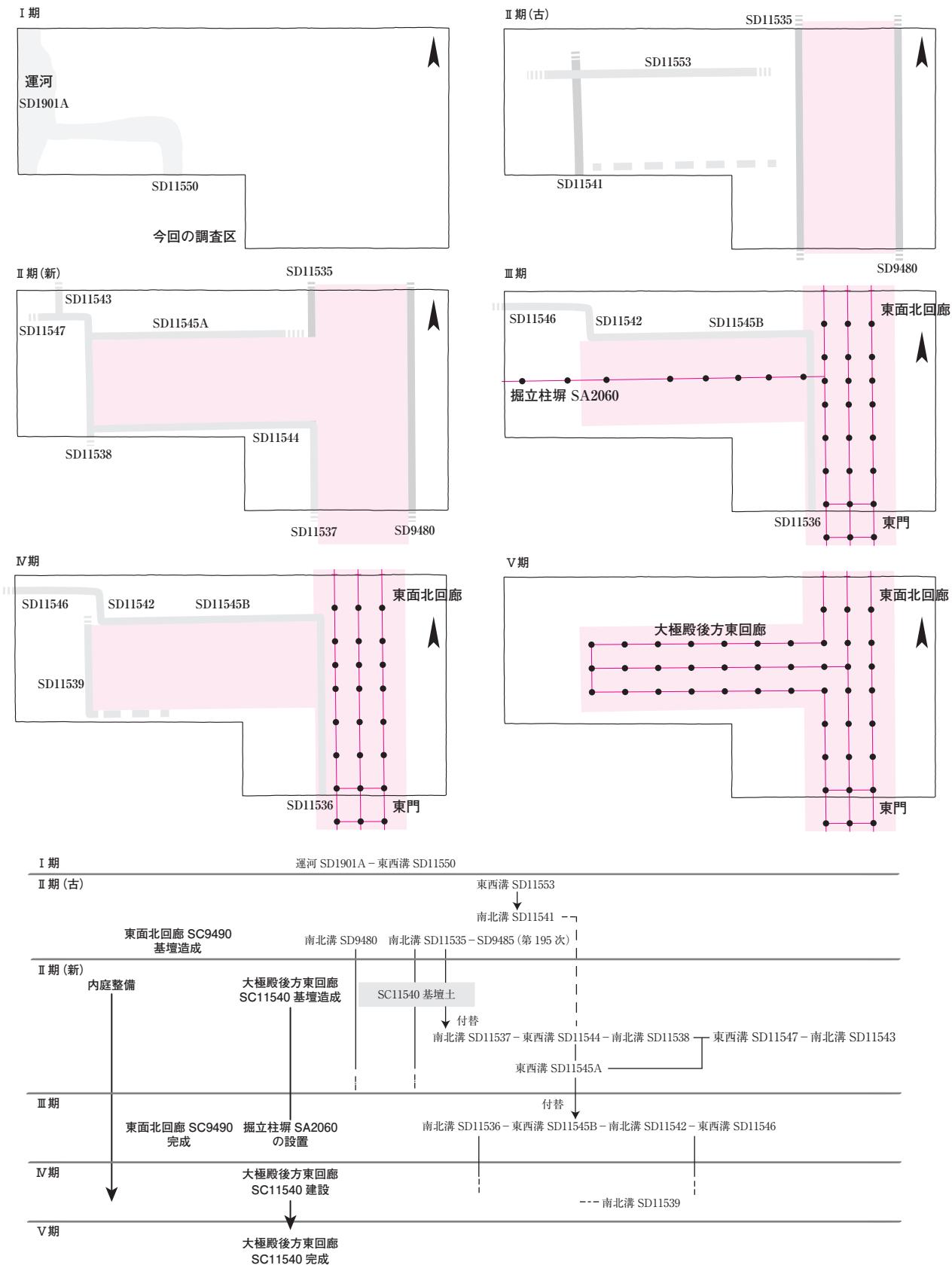


図100 遺構変遷図

掘立柱塀SA2060について、第20次調査では、大極殿北方に位置する、8間15尺（4.5m）等間の東西総長約36mにわたる柱列で、中央の柱穴が先行朱雀大路SF1920の心と一致することから、大極殿の背後を画する塀であるという性格を指摘した（『藤原概報8』）。今回の調査により、柱列が東面北回廊西側柱筋まで延びることがあきらかとなったことから、SC11540と同様に、SA2060も大極殿後方の遮蔽施設であり、回廊との関係から、SC11540完成前の一時期、大極殿後方の遮蔽施設として機能し、SC11540の造営の再開とともに撤去されたと考えられる。つまり、SA2060は、SC11540完成前に設けられた一時的な遮蔽施設と推測できる。

ただし、第20次調査検出のものと比較すると、今回あらたに検出した柱列は、以下のような課題が残る。表12のように、両者には共通要素が多いいっぽうで、造営方位の振れと柱間寸法において若干の差異がみられる。第20次調査でも言及されているように、SA2060は東へいくにつれて造営方位が北へ振れており、本調査区で、その振れはさらに増す。柱間寸法は、第20次調査では、4.4～4.7m（15～16尺）とほぼ等間で東西に延びるのに対して、今回の調査区内では、最小で3.8m、最大で7.5m（13～26尺）とかなりのばらつきがある。このような違いは、SC11540の造営過程と密接な関連があると考えられる。今回の調査で検出した柱穴は、SC11540基壇土を掘り込み、東西に延びる。また、柱穴埋土には上層整地土とともに、根石と同様の礫が下部に入り込んでいた。このことから、SA2060は、内庭部の整備およびSC11540の造営がかなり進んだ段階に設けられたとみられる。つまりSA2060は、SC11540の造営が進むなかで、急遽その完成を俟たずに一時的に設けられた区画塀である可能性が考えられる。

以上の点については、柱穴と礎石据付穴に重複関係がないことから断定はできないが、ここでは掘立柱塀SA2060と大極殿後方東回廊SC11540の関係とともに、大極殿後方を東西に延びる柱穴に関する課題を示した。今後の調査の進展を俟ちたい。
（松永）

7 前期難波宮内裏前殿区画との比較検討

今回、あらたに検出した大極殿後方東回廊SC11540、およびそれに重複する掘立柱塀SA2060の性格を考えるにあたっては、前期難波宮との比較検討が不可欠である。前期難波宮と藤原宮が規模・構造において高い共通性を有することは既知の事実であり、SA2060を初めて検出した第20次調査時においても、前期難波宮内裏前殿後方にある掘立柱塀SA1602・1604との関連性に注意が払われてきた（『藤原概報8』）。

周知のように前期難波宮と藤原宮では、主要殿舎の配置が類似するとともに、大極殿院（内裏前殿区画）および朝堂院の東西幅がそれぞれほぼ同規模となる⁷⁾。ただし両者は完全には一致せず、大極殿院については、前期難波宮が心々間距離で392尺（114.6m）、藤原宮では400尺（116.8m）となる（図101⁸⁾・102）。両者の差は心々間距離に含まれる東・西面回廊の梁行柱間寸法の差に起因する。回廊梁行の柱間寸法は、前期難波宮内裏前殿区画の東・西面で7尺、藤原宮大極殿院では10尺である。それを差し引いた内側柱間の距離は、内裏前殿区画で378尺、藤原宮では380尺となり、より近似した値となる⁹⁾。

そのうえで、藤原宮では回廊桁行の基本柱間寸法は14尺となるが、内裏前殿区画の378尺は14尺等間の27間分に合致する点が注目される。第195・198次調査の成果からは、実際に北面回廊は27間に復元できることが判明した。ただし、東・西面回廊の梁行各1間分（10尺）を取り込んだ東西心々間距離が正しく400尺に復元できることから、内側柱（入隅）間の計画値は380尺とみて間違いない。大極殿院北面回廊では、北門となる中央間のみを2尺広げて16尺としていることが判明したが（『紀要2019』）、結果的にこの処置は、内裏前殿区画の東西幅378尺に対して、計画値を380尺としたことによる余り2尺を北門部分において調整したものと捉えることができる。藤原宮大極殿院の東西幅は、前期難波宮内裏前殿区画のそれを踏襲しつつ、より整然とした規模および柱配置を志向して設定されたことが読み取れる。

いっぽう、南北総長は前期難波宮内裏前殿区画が124.7m（427尺）であるのに対して、藤原宮大極殿院では158.2m（543尺）となり、藤原宮の造営に際して116尺ほど拡張されたことになる。あらためて両者の回廊の配

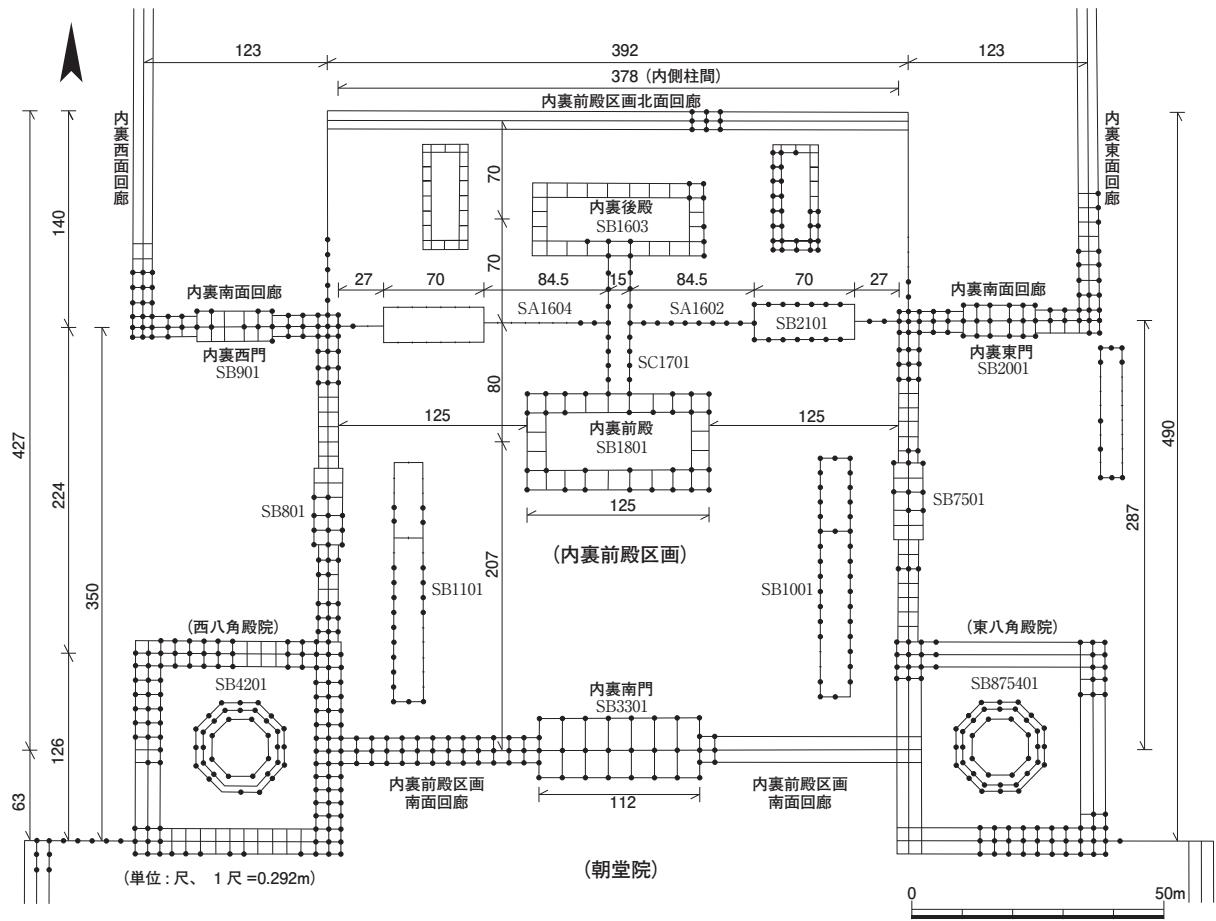


図101 前期難波宮内裏前殿区画の殿舎配置 1:1500

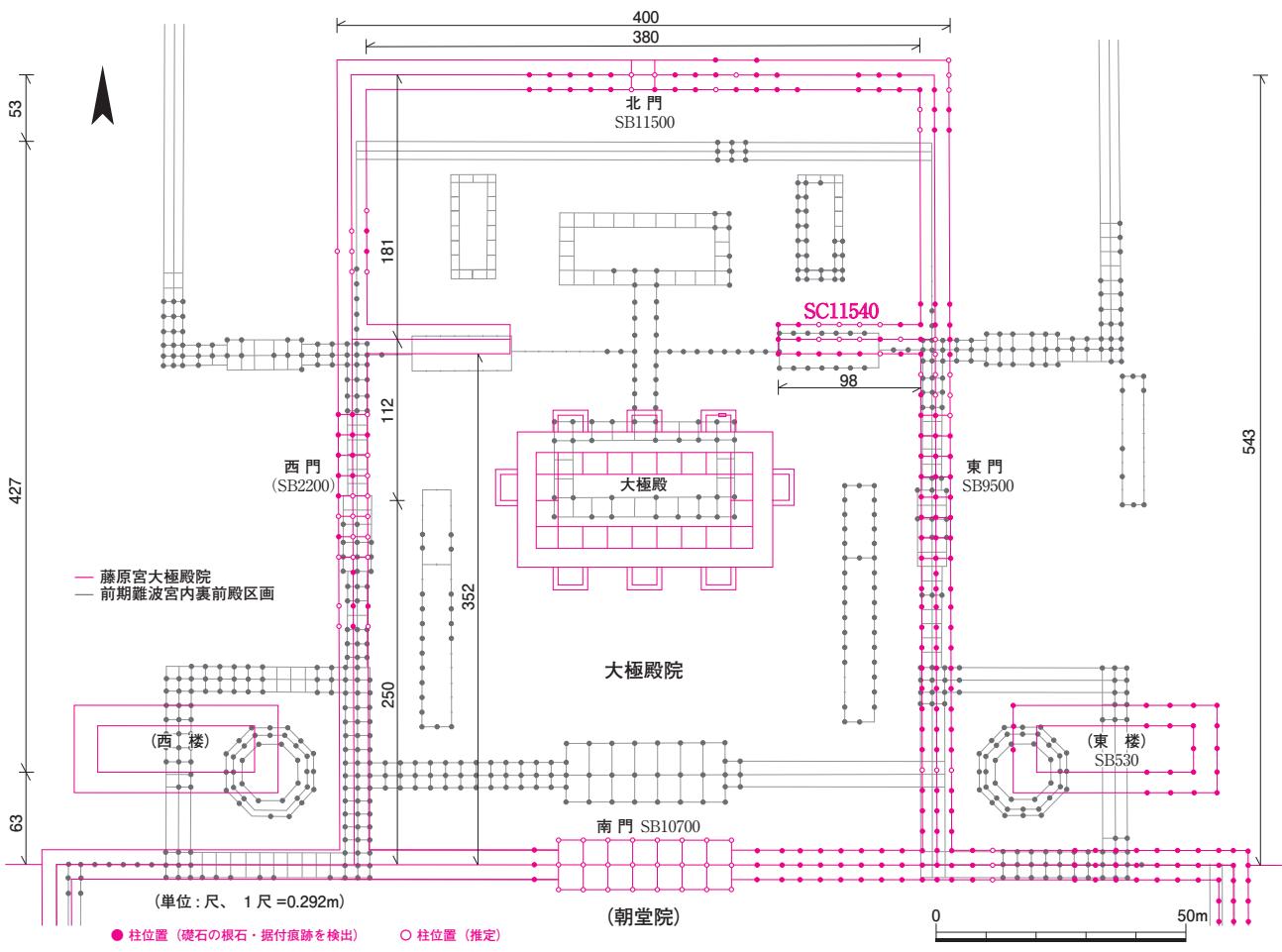


図102 藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画 1:1500

置を比較すると、内裏前殿区画では南面回廊が東・西八角殿心を結ぶ線上に位置するのに対し、藤原宮大極殿院では南面回廊が朝堂院北面回廊と柱筋を揃えて一体化する。その位置は、前期難波宮では八角殿院南面回廊（朝堂院北面一本柱屏）の位置に対応する。したがって、藤原宮大極殿院は、前期難波宮内裏南門心から八角殿院南面回廊心までの距離18.5m（63尺）分、南方へ拡張したとみることができる。南北総長では116尺の拡張であるので、北方へも53尺拡張したことになる。

以上のような理解にもとづいて、図102では、藤原宮大極殿院南面回廊を前期難波宮八角殿院南面回廊の位置に合わせて、両者の建物配置の重なりを示している。この重ね合わせでは、前期難波宮内裏前殿と藤原宮大極殿の位置は一致をみないが、おそらく藤原宮では南門および南面回廊が南へ移動したことをうけて、大極殿の位置も南方へ約20尺移動したのであろう。重要なのはこの図上において、前期難波宮SA1602・1604・SB2101を結ぶ線と藤原宮SC11540およびSA2060の位置が概ね合致する点であり、あらためて両者の密接な関連性が示唆される。

前期難波宮SA1602・1604とSB2101は、内裏前殿区画の後方に位置する内裏本体の南面回廊に柱筋を揃えており、内裏の南限を示すと同時に、内裏前殿区画内においては内裏前殿と後殿がそれぞれ位置する空間を南北に区画する役割をもつ。これに対して、藤原宮の内裏外郭施設は、一本柱屏にあらためられるとともに、その東・西面は大きく南へ延びて朝堂院北面回廊およびその延長線上に南限を置くかたちに変化するため、前期難波宮の内裏南面回廊に相当する施設は消失する。しかしながら、SA2060およびSC11540は、前期難波宮SA1602・1604・SB2101の機能を踏襲して、前期難波宮と同様の位置に設置された蓋然性が高い。

ただし、前期難波宮SB2101は、東妻は未検出のものの、桁行7間、梁行2間の東西棟建物と推定され、東面回廊には一本柱屏を介して接続する点で、複廊構造で東面回廊と直に接続するSC11540とは看過できない相違がある。しかしながら、前述のようにSC11540も同じく桁行7間となる可能性が高いことは両者の関連性を考え上で示唆的である。公表された数値から、前期難波宮SB2101は東面回廊から97尺に西妻を置くことが判明す

るが、SC11540も同じく7間であるとみた場合、その東西規模は14尺×7間＝98尺となり、両者の西端がほぼ揃う点も偶然とは考え難い。すなわち、SC11540は前期難波宮SB2101の位置と機能を継承しつつも、藤原宮では中枢施設全体が瓦葺磧石建物に改められるのにともない、東面回廊から直接連なる複廊構造の施設へと変化した可能性が考えられよう。

このように、今回の調査によって、前期難波宮と藤原宮はその中枢部の構造や造営設計において、これまで以上に連続性が辿れることができが鮮明になってきたといえる。ただし、SC11540に重複して設置されたSA2060の性格や機能については、現状では前期難波宮との比較だけでは充分にあきらかにし得ず、大極殿後方のさらなる調査が不可欠である。また、SC11540およびSA2060によって区画されることになる大極殿院北部の利用形態についても、後殿の有無も含めた再検討が喫緊の課題といえる。

（廣瀬）

8 まとめ

大極殿後方を画する大極殿後方東回廊の発見 今回の調査の最大の成果は、従来空閑地と考えられてきた大極殿院北半部に、大極殿後方東回廊が存在することが判明した点である。

東面北回廊から西へ延びるこの大極殿後方東回廊は、磧石建ち、瓦葺きの複廊で、東面北回廊と柱筋を揃え、一体の回廊として造営設計されている。大極殿後方に区画施設を設ける点は、前期難波宮と共に、前項で詳述した建物配置と造営尺の共通性とともに、両者の関連性はより強まったといえる。

42年前に実施した第20次調査は、大極殿後方に広がる空閑地に後殿が存在する可能性を追求した調査であったが、後世の削平のために、その有無を明確にできなかつたという経緯がある。今回の調査成果は、大極殿後方に後殿をはじめとする何らかの施設の存在をあらためて示唆するものといえる。くわえて、第20次調査ではその性格が不明確であった掘立柱屏SA2060も、大極殿後方東回廊と同様に、大極殿後方を区画する遮蔽施設としての機能を有していたことがあきらかとなった。

運河SD1901Aに取り付く溝を確認 調査区西端で、運河SD1901Aに取り付く東西溝SD11550を確認した。前述

したように、既往の調査成果により、SD1901Aは大極殿院を南北に貫流する状況が確認されてきた。また、大極殿院南門南方では、このSD1901Aから派生して東へ迂回し、北へと延びる南北溝SD10801Bが確認されていたが、今回検出したSD11550は、このSD10801Bにつながるものと考えられる。SD1901Aとの合流地点が判明したことにより、SD10801Bの大極殿以北の経路が確定した。

造営溝の性格　今回の調査では、各回廊の基壇裾に沿って延びる複数の造営溝を検出した。これらの溝は、掘込面や埋立ての過程から、数回にわたって掘り直しや付替えがなされていることが判明した。溝埋土とそれぞれの整地土との関係から、このような溝は、基壇造営に際して掘削される造営溝としての性格を指摘でき、基壇造成時から回廊建設中も排水溝としての役割をになっていたと考えられる（『紀要 2019』）。今回も回廊の周囲に複数の造営溝を検出したことから、このような造営溝の掘削は、藤原宮において普遍的な工法であることを追認するとともに、各建物造営に際する造営手順が明確化した。

造営溝の検討からみた大極殿後方の遺構変遷　遺構の変遷を整理すると、以下の5期にわけることができる。

I期：大極殿北方における回廊造営前の整備段階。

II期（古）：回廊の本格的な造成に先立つ造営溝の掘削および東面回廊の造営開始。

II期（新）：大極殿後方東回廊の造営開始。

III期：東面北回廊の完成。大極殿後方東回廊の造営が一旦中断し、掘立柱塀SA2060を設置。

IV期：掘立柱塀SA2060を撤去し、大極殿後方東回廊の建設を再開。

V期：大極殿後方東回廊が完成し、大極殿東北部の区画が完成する。

ただし、次のような課題も残る。まず、東面北回廊における柱配置である。第195次調査では、東門北端から北面回廊の取付部以南を14尺等間（約4.1m）で15間の柱配置を推定した。しかし、今回判明した大極殿後方東回廊との取付部の柱間調整により、これ以北の柱配置を再考する必要が生じた。

つぎに、大極殿後方東回廊と北門間の空間構造に関する問題である。前述してきたように、今回の調査を通じて、前期難波宮の建物配置との類似性がより高まったこ

とで、藤原宮大極殿においても、後殿およびそれに付随する施設の存在を視野に入れた調査を進める必要がある。

そして、大極殿後方、とくに大極殿後方東回廊以西の詳細な構造に関しても、やはり前期難波宮との建物配置の比較を念頭においていた追究が必要である。

以上、今回の調査では、藤原宮中枢部の構造に関してあらたな知見をもたらすとともに、宮殿配置の変遷や古代宮都の発展過程に関するこれまでの議論に重要な問題を提起する成果を得ることができた。また、今回の調査成果は、前期難波宮との建物配置や造営尺の関連性だけでなく、前期難波宮や飛鳥宮等との比較を通じて、宮中枢部の機能的変化の有無の検討や、つづく平城宮への変遷を考える上でのきわめて重要な資料となるだろう。本調査成果をもとに、次年度以降も、大極殿院および宮中枢部の実態解明を目的に、引き続き調査研究を進めていきたい。

（松永）

註

- 1) 足立 康・岸 熊吉『藤原宮跡発掘調査報告一』日本古文化研究所、1936。
- 2) 東面北回廊への取付状況や桁行・梁行の柱間寸法、そして西側にも同様の施設がある可能性を考慮し、今回検出した回廊の遺構名は仮称として使用する。
- 3) 1 尺 = 0.292m とする。
- 4) 石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究 V』奈文研、2010。
- 5) 十文字健『西田中瓦窯』大和郡山市教育委員会、2011。
- 6) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈文研、1983。
- 7) 中尾芳治「前期難波宮をめぐる諸問題」『考古学雑誌』第58巻第1号、1972（『難波宮の研究』吉川弘文館、1995年所取）。中尾芳治「難波宮から藤原宮へ」『難波宮と都城制』吉川弘文館、2014。箱崎和久「朝堂院の配置計画」『紀要 2004』。
- 8) 植木 久「難波宮の建築」『難波宮と都城制』吉川弘文館、2014に掲載の挿図を一部改変して再トレース。なお、遺構配置図および各部位計測値の初出は、中尾芳治「前期難波宮内裏前殿SB1801をめぐって」『難波宮址の研究』第七（報告篇）、大阪市文化財協会、1981。
- 9) 前期難波宮では主要殿舎の配置に際して回廊の内側柱からの距離が基準とされているとの指摘がある。前掲註8 植木 久「難波宮の建築」2014。